

開催地名	埼玉県鴻巣市
開催日時	令和6年2月17日(土) 15:00～16:00
開催場所	鴻巣市文化センター「クレアこうのす」
語り部	菊池 健一 (宮城県仙台市)
参加者	自治会 自主防災組織 172名
開催経緯	<p>鴻巣市の地震災害の想定として、今後30年以内に70%の確率で発生するとされる「東京湾北部地震及び茨城県南部地震」で震度5強の揺れが想定されている。(平成26年3月埼玉県地震被害想定調査)</p> <p>これは、東日本大震災で鴻巣市で観測された震度と同等の震度であり、今後これらの地震が発生した場合、又、想定規模以上の地震が発生した場合に、自治体の助け(公助)を待つことなく、市民(自治会や自主防災会)が自助又は共助により主体的に行動してもらう「自助及び共助の意識づくり」が課題であるため、語り部の派遣を依頼した。</p>
内容	<p>《東日本大震災に学ぶ》 “自助・共助(近助)の力”</p> <p>◆地震発生時基本動作が出来たのか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・身を守る…………… △余震で身動きできなかった ・火の始末…………… ×動けず辿り着かなかった ・出口の確保…………… △丁度帰宅した瞬間だった ・隣近所の安否確認… ○声かけをした ・家族への連絡…………… ×携帯が機能せず3日後に再開 <p>上記のことから突然のことには、日頃から危機感を熟知している人間でも慌ててしまう。今回の揺れは4分に渡り長引いた、咄嗟に事態が非常事態になると感じた。</p> <p><u>地震発生から避難所までの行動</u></p> <p>◆経過 ※震度7の揺れが4分続きそれを繰り返す</p> <ul style="list-style-type: none"> ・14:46 地震発生、自宅及び近隣の被害状況を確認 ・14:55 自衛隊へリ・県警へリ偵察離陸を確認(経験から緊迫した事態と察する) ・15:10 町内会の被害状況を確認(自主避難を促す) ・15:20 県警へリから拡声器で津波警報・避難指示(再度各町内をまわり避難を促す) ・15:40 大津波 襲来 ・15:40 20分前に避難を促した高齢者がまだ動かず ・17:00 町内会の約6割が避難 4割が自宅避難 <p>◆避難状況</p> <ul style="list-style-type: none"> ・荒浜小学校 約380名(へりにて全員救助)・七郷小学校 約3,000名・七郷中学校 約700名・蒲町小学校 約1,500名・蒲町中学校 約900名 <p>避難所に来た人数が多く確認すべきことが進まず、早く避難所に来て仲間同士で場所取りをする人多数、高齢者や足の不自由な人達が出口の寒い所にいる状態であった。行政の人、リーダーを取るべき人が誰なのかわからない状況で避難を促しても貴重品の確</p>

保などで直ぐに避難に応じないケースがあった為、二次災害を引き起こす原因となる可能性を鑑み毅然とした態度で避難をさせることが大切である。夜は自警団を編成し見回りをする事を説明して少しでも不安を解消してもらえよう工夫をした。

避難所開設と運営

◆避難所開設まで

- ・ 17:00 避難者約 1,200 名強（人が多く人員把握出来ず）
- ・ 22:00 自警団を編成、各町内巡視（22:00-06:00）
- ・ 23:00 各町内会長及び学校長へ避難所運営組織立ち上げの相談・協力を要請
（会議に提示する簡易組織図を手書き作成）
- ・ 08:00 翌日、町内会町、学校長等で会議
（趣旨説明・役員の決定←アドバイザーとし支援）
- ・ 10:00 組織に沿った活動を開始
- ・ 19:00 役員が活動しやすい様避難者を集め役員の紹介と協力の依頼

◆避難所の立ち上げの考え方

日頃から顔の知られている町内会町などをメインとした組織で各部署の配置を行い避難所の人員の掌握、及び協力者受入れが容易になるように気を付けた。その理由は、日頃の町内活動の貢献度によって信頼が高い事、避難者個々の不安の軽減、さらにはコミュニティを最優先した人員の配置を行った。また、情報・伝達等の迅速化を期待した。

◆避難所生活で困った事態

避難所生活とは起床から就寝まで時間を共にすることだが、避難生活が直ぐに終わると思っている人がほぼ大多数であった。

1,500 人の人を束ねるのは容易ではなく決断した内容に賛同されない方がいたこと、また、この人数に対してトイレが 2 個のみだけあった事は緊急改善事項と考える。行政の方々も被災者で有り対応に限界があるとは理解するが、パーティションなど無く個人のプライバシーがない、老若男女、様々な人が雑魚寝をする状況が続き、着替える場所すらない、人と違うものを食べにくい、他人のいびきや子供が騒ぐのが気になる、自分の好きな時に寝ることが出来ない、家族で経済的な会話がしにくい、精神疾患、その他病気の方も一緒に避難生活を送っていて、更にはペットを連れてくる人など多種多様な状況での避難生活の長期化。間仕切り設置を要望したが男性リーダーからみんな家族だから必要ない！と言われ最後まで設置されなかった避難所もあった。授乳する場所もなく壁に向かって授乳した方、生理用品を男性担当者から皆の前で手渡しされた方、女性専用の物干し場も無く下着を盗まれる可能性もあるので生乾きのまま着替えたとの報告もあった。震災発生 3 日後の夜にやっと自衛隊から食事が配られたが、その間自宅からそれぞれが持ち寄って食べたり、灯油も持ち寄ったりして寒さに耐えた。食事が配布されるまでは、婦人部の方々と翌日の避難所の食事の準備を行ったが、朝になると確認していた人数より多数の人が食事を受け取りに来る事態が続き、炊き出しが避難所にいる人達にもいきわたらない状況が続いた為、一旦自宅避難可能な人達に自宅へ帰宅してもら

った。後日、食事が多くの人にいきわたるように記名式にした。指定避難所に避難して1週間が過ぎた頃から慰問が増え始めたが、昼夜に渡り行われて逆にゆっくりする時間が確保できない！と不満も出た。(何故なら遠方からの慰問者を全て受け入れていた為)

◆女性防災リーダーが必要

避難所での問題点を踏まえ女性目線での気遣いは必要不可欠であり最低限の安心・安全の確保、災害リスクの高い方の生活上の配慮等話し合いの場に女性の積極的な参加が不可欠と考えた。

◆避難所運営を阻害したもの

情報の不足(避難者の不安が増すデマが飛び交った)、燃料不足(避難所暖房燃料・避難所運用車両のガソリン)、通信手段の不全(電話・防災無線などが通じない為情報共有が難しかった)が挙げられる。日頃からトランシーバーの格納場所の確認、動作確認、訓練と予備バッテリーの確保は必須と感じた。

◆震災後の地域との連携の強化と成果

今回の震災で特に中高生が大活躍してくれたことから、小学生の時から防災訓練を行ったり、中学生が小学生に防災の話をしたり等、防災訓練の他に避難所設置・会場配置地図作り等も指導している。地域性から海岸から内陸までなだらかな傾斜しかないが、今回の震災では高さ10mの津波があったことから、女性や高齢者が高さ10mの高速道路まで容易に避難しやすいようになだらかな階段を作った。(普段はそれを上がって高速道路に出られないよう整備してある)

津波警報の時、車で逃げる人が多数であったが狭い道等を上がるのに車より車椅子が便利と考え各町内に1台設置をし、車椅子を使った避難訓練を行なった。

◆震災対応で得た教訓

行政・町内・民生委員等との連携強化(指揮系統を通じて行政と地域との情報共有等)や地域・行政・学校との積極的な訓練の実施(災害はいつ何時発生するとも限らない)、顔の見える隣組との更なる関係づくり(町内会行事への参加・挨拶・声かけ等)である。

—近所付き合い→近助付き合いが大事—



開催地より

東日本大震災におけるご自身の体験から、避難所の運営を中心に近所の住民と協力した共助についてお話をいただき、自治会や自主防災会の必要性を再認識することができた。今後も自主防災組織の結成促進および活動支援を行い、自助・共助の体制強化につなげていきたいと思う。